

白い萬、笑顔で綺麗な彼女だが、疲れが顔にじみ出ている。

朝から彼女は何百人の子供の相手をしてきたからだ。それがディズニー・ワールドに勤めたばかりの彼女がむかづくと明るくかわいい子供好きのする動物が無数にいるのだ。

者に押しつけられてしまった大人はストレスがたまる一方だ。自分の子供ないまでも、相手に子供になられてしまつた大人はストレスがたまる一方だ。自分の子供ないまでも、また他の人である。それに大人までもが幼児に戻る。これは一種の歎天の巨大な精神病院だ。しかし圧倒的な数の患者に対してカウンセラー（精神科）は不足している。笑顔をくくながら重荷で頭がゆがむ。この人工楽園に働く職員のすべて、その他の「幼児回帰症候群」とも言べき職業病が発生しているのがはつきり見える。

とくにあのミッキー・マウスのぬいぐるみを着てフロリダの空天下を行く小人に私はいたく同情する。このアメリカの偉大なスーパー・スターはニッポンにおいては単なる友人であるにすぎないが、ここアメリカにおいてはそれは友人であるとともに神格を帯びた偶像である。歩

く偶像の行くところ、人々は幼いころより自分の心の内に住むうしのイメージを目の当たりにしたがのようすに駆け寄り、群れなす。笑顔のミッキーは根性よく無数の幼児および幼児回帰症候群患者の要求を受け入れ、一人一人と交歓するが人々は次から次へと無底にやってくる。

ミッキーが次の場所に移動しはじめる人々は追いつがり、再びそこへ黒山の人だからができる。残酷な狂狂だ。彼はレフアント・マンなのである。ミッキーの中の小人は彼自身が愛されているのではなく、毎日毎日仮面を愛されつづけなければならないからだ。

私はディズニー・ワールドのレフアント・マンを眺めながら、アメリカ国民がなぜこのよくなれたほほい仮面の偶像を他のいかなる生身の人間のスターにもまして愛するのかという謎に気が当たる。

たゞその謎を解くにはこの多民族国家におけるスターと大衆との特殊な関係を考慮しなくてはならないだろう。アメリカのスターは難々なく人々が互いに共有している感覚たるべく宿命づけられており、ミッキーの場合もその基本条件を共にクリアしているといふことだ。この国においてスターは限定された個人や生身や実像から離れることによってこそより多くの人々の心を吸い取つたことが起らるるであら。

その意味において、生身の個人や特定の人格をえがからぬ愛護したミッキー・マウスの存在はうな字へ使つたが、仮面の偶像を他のいかなる生身の人間のスターにもまして愛するのかという謎に気が当たる。

私が経験ならすればアメリカ人ほど率直なピューリタンはない。この聖書の言葉は多民族国家のアメリカにおいて、いかなる他のキリスト教国における人々にもまして実行に移されたし、まあ當然でなければならないかったのである。人がそれを愛護する、と思は、内心燃えきる感じるもの愛してこそ実の博愛があり、そこまで愛せばならぬからである。

このアメリカがある。マウスとオラフの復讐は、そうあるべきアメリカの「やさしさ」のことである。マウスの「やさしさ」の心は、アメリカの大衆と出会いがしらに目を吊り上げて満面に笑みをたたえ、「ヤア、アーチー、ユー、オール、ライ！」と言ったような、そんな感じの表情が付け加えられた。

完璧である。アメリカにおいて空間よりも開拓する力、たゞ最初は勇ましく開拓して来た罪をつぶさうかのようだ。今度は開拓しないと生き残る側にまわった。

ミッキーは生まれて六十年余、恐ろしくも明るいワン・キャラクターのままだ。

「ミッキー・マウスの隠すものに、さらに踏み込んでみよう。

西欧人と東洋人の持つオラフと、小動物に対する感覚は、おそらく異なったものがいるのではないか。この小動物のいる世界は古世から近世にかけての数百年間西欧人にとって大変な鬼門だった。つまり、マウスこそがそのベストの媒介者だった。ヨーロッパの白人がアメリカ大陸にやってきた十七世紀、大陸は豪華にありべストはぜん狂惑をもつていたのである。

ヨーロッパの白人がヨーロッパから逃れて新大陸をめざしたきっかけの一つはベストではなかつたのか。つまり、彼らの先祖の地、ヨーロッパその人口の三分の一を死滅させたペスト

の媒介者であるこの恐るべき小悪魔。それは彼らにとってヨーロッパの暗い過去の生き証人であり、「亡霊だ」。

そのぶんよりと高く重い歴史から新しい天地を求めて新大陸に逃り去った彼らは、大陸にヨーロッパのイメージーションを築いた。ニューイングランド、ニューオーリンズ、ニューヨーク、ニューハンプシャー……など。彼らの初期の多くの街はヨーロッパのどこかの街にミッキーを付けてきたものが多い。ペリ・テキサスと/orのものある。いまでも彼らの深層意識には、ヨーロッパへの郷愁、コンフレックスがぬぐい去り難く存在する。しかし、まだ彼らにとってこの新大陸はヨーロッパの代替地であるとともに、新しい天地でもあるのならばなかった。彼らの移民時代の言葉が示すように、それは「ペストラル（理想郷）」である。そのペストラルという言葉の中にはどうやらニタナ数からキリスト教にひきついた千年前の夢が確実に投影している。

過去の恋愛、ペストは存在してはならないのだ。

ミッキー・マウスの謡を解くうえで、私は個人的だもう一つ思い当たることがある。それはミッキーが「童心」であるということだ。前ではある人種がかりその子供心で一休となるのだ。その意味においてミッキー・マウスはアメリカの商品や文化的な象徴であり、二〇世紀においてアメリカの文化が他のいかなる文化とあわせて、地球上の豊かな民族の中に障害もなくあわせぬ漫遊していくたのは、そのようなアメリカの特殊条件があったからこそである。

ミッキー・マウスの謡を解くうえで、私は個人的だもう一つ思い当たることがある。それはミッキーが「童心」であるということだ。前ではある人種がかりその子供心で一休となるのだ。

アメリカ人はなぜか「ネズミ」を大嫌いよりも、しかるる有名スターよりも有名にしてしまつたのだ。世界にはそれよりもずっと明るくかわいい子供好きのする動物が無数にいるのだ。しかし彼女は何百人の子供の相手をしてきたからだ。それがディズニー・ワールドに勤めたばかりの彼女がむかづくと明るくかわいい子供好きのする動物が無数にいるのだ。

しかし彼女はなぜか「童心」であることはこうしたことかもしれない。しかしながら、これがなぜか「童心」であることは、あるいは「童心」であることを思つたら理窟に苦しみだ。しかしそれは絶対的に、あるいはこうしたことかもしれない。確かに彼女は、これまでに國家の運営に携わった動物ではない。ヨーロッパにおいては、それは腹いしアヒルの子として

こんなに人がからめられる醜く汚い動物でも、私たちはそれを愛することができるのです。

平等と博愛と人権を国家精神としなければならないこの国の宿命がネズミというシンボルを遺憾せたのではないか。そのことはもう一つのディズニー・キャラクターであり、スーパー・スターである「ナルド・ダック」だと呼ばればより正確になるようと思ふ。この動物も西欧人にようつけて好まれた動物ではない。ヨーロッパにおいては、それは腹いしアヒルの子として仲間はすれにささされた異端だ。

「誰の隣に愛せ」

マウスはだれもが親しめるよう、「ミッキー」と名づけられた。

おひ、「ミッキー・マウス」という愛称を与えただ「フレネズミ」は、あの神経質そなとん

がつた顔をケシゴムで消され、やつくりと丸い頭に描き変えられた。

ヒゲが生えている

ツバキ飢えている鼻は、サーカスの道化師のようなんびりとしたダメゴツ鼻になり、垂涎の

あみだいたい危険な舌は抜かれて、生まれたばかりの赤子みたいなミルク飲み人形の口に退化さ

せられた。外形からはあのベスト・マウスの危険な面影はもうそこではない。あとは表情だ。

ちゃんとある古典的な單純な愛おしほ

ホープがアメリカの大衆と出会いがしらに目を吊り上げて

満面に笑みをたたえ、「ヤア、アーチー、ユー、オール、ライ！」と言つたような、そんな感じの表情が付け加えられた。

完璧である。アメリカにおいて空間よりも開拓する力、たゞ最初は勇ましく開拓して来た罪をつぶさうかのようだ。今度は開拓しないと生き残る側にまわった。

ミッキーは生まれて六十年余、恐ろしくも明るいワン・キャラクターのままだ。

アメリカ 藤原新也



藤原センター出版局

日本の原爆爆撃の時、アメリカの大半は日本人や日系の学生を守ったという話を以前に書いたが、その他にもアメリカを上げている。

一方で、アメリカが広島、長崎に原爆を落とし、その広島に日本人の原発を作り、アジアへ原発を広めるきっかけによう

と画策しだすがにそれは失敗したが、アメリカの原発会社が多く原発を日本に作り、アメリカ及びアメリカの評価

が大きさはあればきりがない。今回の震災の時でも、アメリカ及びアメリカのいち早い的確な支援は、アメリカの評価

を上げている。

そこで、アメリカが広島、長崎に原爆を落とし、その広島に日本人の原発を作り、アジアへ原発を広めるきっかけによう

と画策しだすがにそれは失敗したが、その他のアメリカの評価

が大きさはあればきりがない。今回の震災の時でも、アメリカ及びアメリカの評価

を上げている。

一方で、アメリカが広島、長崎に原爆を落とし、その広島に日本人の原発を作り、アジアへ原発を広めるきっかけによう

と画策しだすがにそれは失敗したが、その他のアメリカの評価

が大きさはあればきりがない。今回の震災の時でも、アメリカ及びアメリカの評価

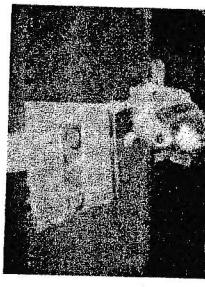
を上げている。

このように、私達の生活及び内面の中に、アメリカは深く入り込んでいる。それが今、中国の大国民党やアラブ諸国との力の

合意で、アメリカの影響の揺らぎ、日本のアメリカ一边倒が立ち行かなくなっている。

(以上は、イタビー・東大教授・吉田後藤さん「高度成長とアメリカ成功物語の裏側で米支配が内面化、原発はその

象徴」朝日新聞 9月4日朝刊による)



吉見教授の著作『夢の原子力』(ちくま新書、2012年8月)は、社会学者らしく、この歴史の歴史を、そして、日本人のアメリカに対するアンビバントな感情を、的確に描き出している。我々の内面に深く入り込んでいるアメリカ(文化)を、意識することの重要性を指摘している。

今の大半の「英米(文学)学科」や「国際学部」の学生達は、アメリカに対して、どのように考へているのであるか? 英語ができ、憧れのアメリカに少しでも近づければ、ハッピー、と脳天気に考へているわけではないであろうが、腹聞いてみたい気がする。

原子力のカルチュラル・スタディーズ

著者名: 吉見後藤

出版社:

ちくま新書

出版年:

2012年

特にこれは、原子力の政治的、経済的側面と言うよりは、文化的な側面である。原子力のカルチュラル・スタディーズと言つていい分野である。

次のこととは、私がほんやりとか理解していかつたことある。原子力の暗喩がこんなに満ち溢れているとは知らなかつた。

<ピニニ水着>は、それをミニ付いた女性が周囲の男たちに与える「破壊的刺激」がアトム=原爆に輪えられ、やがてその実験が集中的に行われていた「ビキニ爆風」の海と「原爆級に劇的」な水着の女性というイメージが合体して現在の名前が確立したのである。(200ページ)

<原水爆ノンゲ>は「冷戦リエンタリズム」の匂いを帯びてなくなかつた。.. 1957年にワンドー・ジャパンが歌つた「フジママ、ママ」はセクシャルな原爆イメージ、「日本に対する露骨なオーリエンタリズムを倒錯的に結びつけた歌」である。この歌では、「フジママ、ママ」が原子爆弾そのものに輪えられ、.. 原爆した側に対する徹底的な純慾感。。。驚くことに50年代の日本は熱狂的に歓迎し、.. 雪村いすみが日本語版をカバー。(201-204ページ)

<日本版「ゴジラ」>が表象したものは、紛れもなく原爆の恐怖そのものであった。1954年という誕生の年から考へても、映画での山根博士による説明からしても、ゴジラは何よりもビキニ沖で被爆した第5福島丸の暗喩であり、さらに原子爆弾そのものの暗喩でもあった。(216ページ)

<手塚治虫の機械アトム>は原子力エネルギーで作動するロボットであり、体内に原子炉(10万馬力)を内蔵している。しかもアトムの妹はウラン、弟は「コハルト」と名づけられている。.. トランも機動戦士ガンダムも原子炉を内蔵したロボットであった。.. 戦後日本のアニメにおけるロボットイメージは、その原点で原子力と不可分の関係にあった。(243ページ)

<「風の谷のナウシカ」>における王蟲もまた、核を生み出した文明(巨神兵)への徹底的な問い合わせを含んでいる。(256ページ)

<大友克洋「AKIRA」>において、外部の何物かによって落とされた核爆弾によってではなく、身体的に病んだ少年の超能力によって覺醒する原爆並みの力のために、近未来都市が破壊され、「様子を描くことのなつたのである」このよう

に、70年代以後、原子力的な暗喩のイメージが文化的な自己意識に深く内面化されていったのは、戦後日本のメインストリームの大衆意識が、原水爆を高度成長以降の日本には無縁の、その外側にしか存在しないはずのものとして遠ざけてきたことと見事なまでに逆行して立っていた。(261-262ページ)

～教室は目の色でわけられた～ A CLASS DIVIDED

制作 WGBG (アメリカ) 構成 ウィリアム・ビーターズ 45分

＜内容紹介＞

1968年4月、アメリカ北西部のアイオワ州・ライスビルの小学校で人種差別についての実験授業が行われた。小學生3年生の担任であるジョン・エリオット先生は、キンメル教師の死後、黒人指導者に無神経な態度をする白人の解説者の傲慢な態度を見た。そして「子どもたちを差別意識という「アーヴィングスから守りたい」という思いを持ち、次のようにある実験授業を試みた。クラスを青い目と茶色い目の子どもに分け、「青い目の子はみんないい子です。茶色い目の子はダメな子です」というように、青い目の人は優しく、茶色い目の人は劣っていると決めて1日を過ごす」というものだ。逆に翌日は茶色い目の人は優れ、青い目の人は劣っているとして生活する、というものだった。エリオット先生の送の「目の色が巻き起こした嵐」と題した映像として残されている。エリオット先生のこの授業は差別意識という「アーヴィングスから守りたい」という思いを持ち、次のようにある実験授業に対する考え方である。そこで、子どもの人種差別に対する考え方を変えることができた。そして、授業の2週間後に国語と算数のテストを行った。子どもたちの点数は優れていたとされるに最も高いところで、高くなつたといつて、授業で大切なことを学んだという意識が生まれた。実験授業の2週間前と授業をしている2日間、そして授業の2週間後に国語と算数のテストを行った。子どもたちの点数は優れていたとされるに最も高いところで、高くなつたといつて、授業で大切なことを学んだという意識が生まれた。実験授業は大人にも人種差別と眞剣に向かい合ひ人種差別を身近なものとして捉えることを可能にした。

エリオット先生は教職を去り、人種差別に対する犯罪がなくなることを願つて全米各地の刑務所や企業でこの試みを行つている。この作品の中にも刑務所で職員に対して行われた講習会の様子が紹介される。実験授業の主旨を説明せずに目の色によって差別を減らす講習会を進め、差別された青い目の職員らはその理不尽さ、深い絶望感を感じることになる。... エリオット先生の実験授業は大人にも人種差別と眞剣に向かい合ひ人種差別を身近なものとして捉えることを可能にした。

小学校3年生が、目の色で優劣をつけた後たた15分で態度に変化がでてきたことに恐ろしさを感じる。自分は優れていたとされ、そして相手が劣っていると決めてつけられたことで「至極のうな氣分」になつて相手を見下すのだ。これは社会にはびこつている人種問題と同じ構造である。この実験授業を日本の学校でも行うことは簡単ではないと思つが、実際には痛みを感じる以上に理解する方法はないのではないかと思う。子どもたちのテストの結果にも表れているように、人は認められること、自信を持つことで持つている能力を十分に、あるいはそれ以上に發揮することができるのだということがわかった。(玉野)

差別 discrimination 特定の個人や集団に対する偏見や差別に対する偏見によって偏見する固有な特徴を考慮するなどしないにかかわらず、彼らを異質な者として扱い、彼らが運んでいる平等待遇を拒否する行動。すなはち差別は、自然的な社会的カトリックに根柢をおく区別をめぐらす行為である。差別は、公然たる公式的偏見(法律での不平等表現など)、私的個人によって行はれる偏見(居住地場、交通規則などの規制、民族差別など)、差別形態、差別意識、セグレゲーション、差別的行為の形態がある。たとえば、黒人にに対する居住地場、交通規則などの規制、民族差別などでの偏見、民族差別; 人種差別; 差別意識; セグレゲーション; 逆差別

差別意識 sense of discrimination, discriminatory consciousness 日常生活において、伝統や教育によって潜むする差別意識を肯定する意識で、さまざまな考え方の偏見、差別形態、差別意識などでの偏見、民族差別; 差別意識; 逆差別

差別的行為 differential fertility 社会階級や教育によって潜むする差別意識を肯定する意識で、また偏見や、差別形態には、一般的に、職業、所持、居住地場(農村・都市の違い)、セグレゲーションなどによる出生率の差異がある。

差別出生率 differential fertility 社会階級や教育によって潜むする差別意識を肯定する意識で、また偏見や、差別形態には、一般的に、職業、所持、居住地場(農村・都市の違い)、セグレゲーションなどによる出生率の差異がある。

出生率を含めて差別出生率といふ。一出生率を含めて差別出生率といふ。

出生率を含めて差別出生率といふ。

1 アメリカ

上智大学教授 武内 清

- チェックポイント●
- ①各教科のカリキュラムや教育方法に、道徳的、価値的内容が含まれている。
- ②多文化、異文化に対する理解、尊重、共生をはかる教育が行われている。
- ③集団に全所属ではなく、個人の選択を尊重し個性を生かす教育が行われている。
- ④それぞれの時代の教育改革は、時代の要請する価値態度を含んでいる。現代は社会的平等と学力の向上が主目標である。

学校における価値教育は、道徳的な道徳教育だけでなく、潜在的カリキュラムも含めた学校生活全体を通して行われている。アメリカの価値教育の特質を明らかにするために、アメリカの一都市の小学校のクラスの様子を業描することから始めよう。

1 娘(5学年)の学校体験

担任のクレントル先生は、一見ときめきいたこわものの中年女教師という第一印象だが、実は親切な情のあつい先生で、ふつらほうながらさりげない配慮をよくしてくれた。だとえば、始業日に生徒が一人ずつ自己紹介をして娘の番になりとまっていると、先生は「私も日本語が話せないの。英語でいくつか質問しますね。お名前は?」と、英語を話せないことと日本語を話せないことを対等に扱い、最初から英語が話せないことは少しも恥ではないという言い方で、黙黙している娘の気持ちを楽にさせてくれた。クラスにはその担任の先生以外に、補助教員が2名いて、授業や採点の手伝い、そして同じクラスにいる自閉症児、ダウン症児の面倒をみていた。机の配置は、4名～5名ずつのグループで

日本の班学習のような座り方をしていた。授業方法は、伝統的な一斉授業の形が多く、また教科によっては二つか三つに分割する場合もみられた。教科書を使用していたのは算数のみで、プリントを使った授業が多かった。算数は、進度別に個人個人違ったプリントで問題を解き、自分で採点する場合が多かった。社会科は、自分で考える内容が多い。たとえば、自分がインディアンだったら、こういふ場合どうするかを考えながら、インディアンの生活について学ぶ授業が2ヶ月続き、娘はすっかりインディアン好きになった。道徳の時間がとくにあるわけではないが、各教科のなかに道徳的、価値的内蔵が含まれている。

毎時間、生徒の教室の出入りが多いのが目立った。それは個人個人選択科目が違うことによる。コーラス、ストリングス、コンピュータ、ESLクラスなど好きな科目を取り、また交番で近くのスーパーへお菓子の材料を買ったりと遊びたいときに校庭をかけ回る。子どもたちの異文化に対する許容性は、日本にいくときも、クラスを抜けることになる。子どもたちの異文化に対する許容性は、日本に比べるに大きい。学校初日から、娘と一緒に住んでいた。

最初の日からその子と一緒に校庭をかけ回る

ていた。友だちグループは日本ほど隔離的ではない。まもなく、仲のよい5人組ができ、いつも行動と共にしていた。

イントーナショナルティー(民族衣装を着てくる日)には、アメリカ以外の国からきていた子の国や文化の紹介が、娘の参加を交えて

(日本人の子や親は着物をきて、折紙や習字の実演をしていた)行われた。グレイジャー(奇妙な髪型で登校する日)、パシヤー(パジャマで登校する日)、ペレンタ(インナー(プレゼントを持ってきてよい日)、父娘の着場を尋ねる日など、特別な日が多く、学校外の生活も学校へ持ち込まれていた。

6月の上旬には、はや学年の最終日がくる。娘は最終学年(5年)なので、卒業式がある。

卒業式は体育館で、5年生とその親が出席して、校長先生のスピーチと校長と担任の先生からの一人ひとりへの卒業証書授与があり、その後、同じ場所でケーキとお茶のできるバー・ティーがあった。バー・ティーでは親同士がまた親と子がなり顔見知りで、みんなが別れを惜しんでいた。

それから長い2ヶ月半の夏休みがくる。アメリカ人の子に、夏休みの計画を尋ねると、友だちと遊ぶ、カヌーにのる、祖父母の家にいく、家族で旅行するといろいろだが、基本的には、家でのんびりと夏を楽しむというふうであった。それに対して、日本人家庭の子どもたちは、目一杯スクールを詰め込むことが多い。つまり、サマースクール、集団キャンプといった、学校的なものに子どもたちを参加させ、遊ぶたいと考える。

アメリカ人は、夏休みは基本的に家庭とのことで、生徒が自主的に行動し学級の統制がゆれる

がついた日米の学校や教育の類似点、相違点は、次のようなことである。

第1に、異文化に対する許容度の大きな社会である。白人中心の文化から、さまざまな人種の文化を対等なものとして認める方向に動いている。アメリカも、かつては白人中心

の融合政策(melting pot)がとられていましたが、それが文化の多様性を生かすサラダボウル政策(salad bowl)に変わりつつある。

多文化教育(Multicultural Education)が盛んになっている。生徒たちの出自の民族や父娘の着場を尋ねる日など、特別な日が多く、文化を大事にし、その尊重のうえで同じ人間として、理解し共生できると確信している。

第2に、クラス(学級)や時間割に関する考え方方が、日本で少し違う。日本では学級単位で時間割が考えられているのに対して、アメリカでは個人単位で時間割が考えられている。日本では、生徒は学級に全所属で、先生も自分のクラスの子を自分の家族の一員のように心持して全面的に面倒を見る。アメリカでは、生徒はクラスに半所属で、その時間に自分にあった科目があればそちらを選択して

クラスを抜ける。アメリカの教室で生徒の出入りが多いのは、そのせいである。クラスが開放的な分、いじめがおこりにくい。

第3に、教師の生徒に対する統制の仕方が変わっている。日本の教師は、子どもと休み時間に一緒に遊んだり、生活指導によって生徒の心をつかむことが期待される。アメリカの教師は、生活指導はカウンセラーにまかせ、自分

の心をつかむことが期待される。アメリカの教師は生活指導でいかに生徒の心をつかみ、やる気をおこさせるのかに専念する。学級の中にいろいろな係をつくり、教師の指導なしで

も生徒が自主的に行動し学級の統制がゆれる

ようになっているのが日本の学級であり、アメリカの学級である。

2 学校生活のE米比較

現代のアメリカでは、ホームスクールで子どもを教育する家庭が増えている。1988年で

3 ホームスクリーニングの拡大

アメリカの小学生に娘を1年間通わせて気付いた。

指導モデルの日米比較：初等教育に見る教育のハラダイム

渡辺 雄子（東京大学社会科学研究科）

1.はじめに

日本の教育、特に初等教育は国際的にも高い評価を受けているにもかかわらず、1980年代を通して、アメリカに学ぶ日本人派遣社員の子弟の少なからぬ人数がアメリカ人の教師から「学習障害児」さらには「知識の遅いが優しい」との評価を受けた事実は日本気質や習慣の違いが評価に影響を与えた事は十分に考えられるが、それ以外に各國の学校で重視されている論理形態（出来事の把握のさせ方）の違いが大きな要因になっていることが考えられる。本発表では日本の小学校でどんな「説明のスタイル」（Styles of Reasoning）が教えられているのか、主にどのような順番で話したり書いたりするように教えられているのかに焦点を当て、それがいかに日本の教育の理論と実践の説明に反映つかつていて、授業の観察、教師へのインタビュー、教科書の比較分析をもとに考察する。

2.先行研究との関連

日本教育を比較の視点から捉えた研究では、高橋・滝井（1995）が日本全国に見られた教育目的の差異を明らかにし、そのため指導のパターンがどのくらい異なるのかをエヌ・グラフ（N-Graf）によって構造化した。また恒吉（1992）は東洋への開拓行為調査方法、以下は項目で行われた。1)歴史及び作文の分析、2)歴史と国語の教科書の分析、3)教師へのインタビュー。

3.論理的特徴みたす

日本的小学校でどんな説明のスタイルが教えられているのかを調査するために、本研究では出来事を提示する順序に焦点を当てる。認知心理学、歴史学、應用言語学の研究において出来事をどのような順序で述べるかと、論理形態の間に深い関係があることが指摘されている。言語学者のカーラー（1996）は、それが言語には独自のプログラマの順序があり、その順序を学ぶことはその言語の論理システムを学ぶことに他ならないと述べている。歴史学者のホワイト（1978）は、あるジャンル、習慣、社会に規範的な振り小学校でどんな「説明のスタイル」（Styles of Reasoning）が教えられているのか、主にどのようないかに焦点を当て、それがいかに日本の教育の理論と実践の説明に反映つかつていて、授業の観察、教師へのインタビュー、教科書の比較分析をもとに考察する。

日本的小学校でどんな説明のスタイルが教えられているのかを調査するために、本研究では出来事を提示する順序に焦点を当てる。認知心理学、歴史学、應用言語学の研究において出来事をどのような順序で述べるかと、論理形態の間に深い関係があることが指摘されている。言語学者のカーラー（1996）は、それが言語には独自のプログラマの順序があり、その順序を学ぶことはその言語の論理システムを学ぶことに他ならないと述べている。歴史学者のホワイト（1978）は、あるジャンル、習慣、社会に規範的な振り

その順序よく聞かれた質問は、「もしこんな事が起こったら、どんな風物となる? そしたらどうする?」という、歴史的な出来事と共感の感情により典型・常識化するものであつた。これに対して、米国では「なぜ?」という質問が教師が教えることによると、結果に關係しない出来事を切り捨てて、原因と結果を直接結び付ける訓練を行っていた。この指導の過程を振り返りながら、その可能性と限界についても検討したい。

2.モデルの展示

調査で明らかになつた知見をもとに、日本の時系列と米国の因果連鎖という論理形態がどのように教育の実践と関係するのかを以下のように対比表にまとめた。

当時の発達で時系列と因果連鎖という概念がどこまで接する上で教師が重要なと考える能力が、日本では理解力」と「共感する心」であるのに対し、米国では「分析力」（analytical）であることがインタービューにより明らかになつた。

論理形式の日米比較

	米	国	日本
論理形式	論理的	論理的	時系列
論述の方法	特別な制約の関係を保る	ノンノーマル	規則、規範
論述の対象	結果	問題	問題的叙述
説明の原則	既往歴（結果に既存しない）	（アーチカル性の可能性）	規範的推論
論述の範囲	既往の経験（過去の経験）	（時として既往不可堆積性）	既往の経験
論述の構成	既往の経験を目標とする	（時として既往不可堆積性）	既往の経験
論述の手段	特定の結果を明らかに行動	状況に応じた適切な説明	規範
論述の意味	自己の過往の結果責任を負う	規範	規範
論述の強度	弱	強	強度、共感
論述の能力	分析力、決断力	分析力、決断力	情操的
先生と生徒の關係	権威的	一貫性、二貫性	情操的
評価規範	既往の経験と照合	（ノンノーマル）	既往の経験と既存する
論述の範囲	既往の経験	（ノンノーマル）	（ノンノーマル）
論述の構成	既往の経験	（ノンノーマル）	既往の経験
論述の手段	既往の経験	（ノンノーマル）	既往の経験
論述の意味	既往の経験	（ノンノーマル）	既往の経験
論述の強度	弱	強	強度、共感
論述の能力	分析力、決断力	分析力、決断力	情操的